

プレスナーの哲学的人間学における位置性の理論(2)

奥 谷 浩 一

一連の論考の連載からなる本論文では、プレスナーの主著『有機的なものの諸段階と人間』において展開されている中心思想を対象とし、とりわけ「位置性」の理論に焦点をあてながら、難解なことで知られるプレスナーの哲学的人間学の本質的な諸特徴を把握し、その人間学思想と、「哲学的人間学」の定礎者シェーラー、そして同じ流れを汲むゲーレンの人間学思想との同一性と差異性とを解明することを試みる。前稿においては、プレスナーの人間学の諸前提として、生の哲学とのかかわり、人間学にたいする課題意識、またカントの批判哲学および現象学的方法との関連におけるその人間学的方法的な独自性を考察した。本稿においては、デカルト的な心身分離論、ユクスキュルの環境世界説、ケーラーとドリーシュの論争との関連をふまえながら、プレスナーの位置性の理論の導入部となる生命あるものの「境界」の概念、そしてこれにもとづく有機的なものの本質諸徴表の理論の全容を究明する。

[キーワード：哲学的人間学、ア・プリオリズム、位置性、境界、二重アスペクト性]

目 次

はじめに

第一章 プレスナーの哲学的人間学の諸前提(1)

- (1) 『有機的なものの諸段階と人間』の構想へといたるいくつかの諸契機
- (2) 生の哲学の問題状況
- (3) プレスナーの哲学的人間学の課題意識
- (4) 哲学的人間学の方法；カントの批判哲学、解釈学、現象学

(以上、第66号掲載)

第二章 プレスナーの哲学的人間学の諸前提(2)

- (1) デカルト派の二者択一原理との対決
- (2) ユクスキュルの環境世界説をめぐって
- (3) 二重アスペクト性の提起
- (4) ケーラーとドリーシュの論争；機械論と生氣論との対立を超えて
- (5) 境界の概念と生命あるもの
- (6) 有機的なものの本質諸徴表の理論に向けて

(以上、本号掲載)

第二章 プレスナーの哲学的人間学の諸前提(2)

(1) デカルト派の二者択一原理との対決

プレスナーは、前稿において一般的に考察したように、いくつかの思想と課題意識との合流点において自らの哲学的人間学を構築しようと意図したのであるが、その哲学的人間学の具体的な展開を検討する前に、なお残るそのほかのいくつかの原理的・方法論的な諸前提について整理し、考察しておかなくてはならない。プレスナーがおのれの哲学的人間学の体系的な展開を行うにあたって方法論的に対決すべき主要な標的と見なしたのは、何よりもまず、哲学的人間学の中心的部分の概念装置を経験科学から借用してくるという経験主義的な立場であり、全体としての人間の諸性質を要素へと分解・還元する還元主義であり、いわば自然科学的方法唯一論でもあった。いわば近代科学を特徴づけるこうした傾向性の把握を行ったあとで、プレスナーはさらにこうした方法論的態度を基礎づけている原理的立場の批判へと移るのだが、そのまず第一はデカルトまたはデカルト派の二者択一原理との対決にほかならない。

周知のように、身的・物的なもの、延長するもの *res extensa* と、心的・精神的なもの、思考するもの *res cogitans* とを、おたがいに排除しあうとともにおたがいを必要としないふたつの有限実体となし、これら両者のあいだに厳然とした存在論的な分離と区別を行うことによって、物心または身心の二元論を哲学の出発点にすえたのは、デカルトであった。デカルトのこうした物心または身心の分離は一方では、長さ・幅・深さの三次元を物体の固有の性質として物体性を空間的な拡がりである延長へと解消することによって、物的な事物の全宇宙的で等質的な拡がりを原理となし、そうすることによってさらに事物的世界の分割・形状・運動を数量的諸関係として表現しうる機械論的な因果法則の探究をめざす近代自然科学的自然観を準備した。他方ではそれは、コギトを原理として立て、精神を人間の所有にのみ帰したことによって、今日まで西欧の伝統として維持され続けてきた意識中心主義と人間中心主義をももたらしたのであった。プレスナーが自らの哲学的人間学の基礎づけを行うにあたってまず克服しなければならないと考える対象は、こうした思考するものと延長するものとのデカルト的峻別と、これによって大なり小なりの程度に影響されて物体か意識かの二者択一の原理にもとづいて自然と人間とを一面的にとらえようとする方法論的態度である。したがって、プレスナーの哲学的人間学のスローガンは、まず第一に「デカルトからの離脱」⁽¹⁾ とならざるをえない。

デカルトのこうした存在論的区別に由来する心身二元論はさしあたり、その認識論的な帰結としてはたがいに両極に位置するふたつの可能性をもつことになるが、プレスナーによれば、それは次のような可能性である。「次のような可能性だけがあることになる。つまり、物体の質的な現存在および現出 *Erscheinung* の様式を機械的に理解し、これらを量へと解消する可能性か、それともこうした分析を避けながら、これらがもろもろのコギタティオ *cogitatio* の内容、つまりわれわれの内面性の内容および所産であると言明する可能性かのいずれかである。」⁽²⁾

これを言い換えれば、ひとつは、延長と物体性とを同一なものともみならずことによつて、自然的に事物を認識する唯一の方法を機械的・数学的な測定にもとづくものとなし、これを量的に還元するという客観主義または自然科学主義の可能性であり、もうひとつは、これとは逆に、存在は意識または自我の内部にしか生起しないのだから、一切を自我存在の思想具有性または内面性にもとづけるという主観主義的な立場の可能性である。しかし、プレスナーによれば、こうしたおたがいに相容れぬふたつの可能性のいずれもが、人間の具体的な場面において作用しているはずの延長するものとも思考するものとの現実的な結合をアポリアのままに残すことになる。

プレスナーによれば、前者の可能性こそ、近代精密科学の採用する実験的・計量的方法にはほかならないのだが、しかし、こうした方法は勝利を約束されたかに見えながら、例えば、われわれが感覚の質の問題、つまり色の質やゲシュタルト（形態）の質の問題に直面する場合においてとりわけそうした方法的把握の限界が示される。ゲシュタルト質とは、クリスティアン・フォン・エーレンフェルス⁽³⁾の1890年の論文によって提唱された概念であつて、空間的形態やメロディーなどの音列によって象徴される場所のたんなる感覚要素の総和には還元されず、表象複合体を基礎として新たな秩序のレベルを構成し、複数の階層を形成する、意識に直接与えられたものにほかならない⁽³⁾。こうした色の質やゲシュタルト（形態）の質は、どうしてもこれを知覚している主体とその知覚の構造によって媒介されざるをえないのであつて、それも「諸物体が内面性に対して与えられていて、内面性によつてとらえられるからであり、これらの物体自身には疎遠な、これらの物体とはまったく異なつたこうした媒体のうちで、これら物体の純粋な本性の屈折を受ける」⁽⁴⁾という問題局面において成立せざるをえない。したがつて、プレスナーにとっては、まさしくこの問題こそ、デカルト的な二者択一原理にもとづき、世界認識を物体認識と自我認識とに区分する独断的な方法的態度に立脚した感覚物理学と感覚心理学とが一様に把握に失敗する問題次元にほかならない。「神経と大脳における機械的な刺激と機械的な物体諸事象とが『自我』に衝突することから質的なトーンをおびた対象像がもたらされるのだが、現代の生理学と認識論には今日の時代にいたるまで、これと同じような、肉体と自己とのあいだにあり、感覚の質のもともとの核心 Kern である、延長するものとも思考するものとのあいだの結合 conjectum についてのアポリアが、これと同じような謎がつきまとつている」⁽⁵⁾と述べているように、プレスナーによれば、物と心とが交差する問題局面においては、物体性と延長との同一視、自然的な現存在と計量可能性との同一視、そしてこれにもとづく機械的・数量的な接近態度によつては把握しえない、計量的方法によつてはとらえられない異質の諸性質が依然として多数残されているのである。

ところで、物体の知覚と認識が内面性によつて媒介されており、内面性を抜きにしてはそもそも可能ではないという視点は、プレスナーの思想を、エルンスト・マッハの感覚主義やアヴェナリウスらの内在哲学へと近づけてゆくことになる。先のような問題局面においては、デカルトおよびデカルト派によつて分離された、延長するものとも思考するものというふたつの「実体」

はむしろ結合しあっているのであって、この結合が物体の現在を可能にしている。しかし、デカルト的な二者択一の原理にもとづくならば、延長の領域のほかには思考・自我・意識・心の領域しか残されてはいないから、こうした困難な問題局面を前にして、研究者は計量的・数学的方法によってはとらえることのできない諸性質を、今度はこの一般的に自己または内面性と言い換えることのできる領域に負わせようとする。ここに成立するのは、現出を内面性へと還元する立場であり、あらゆる質を、もろもろの感覚を通じてのみ主観に与えられたものと解する、主観主義的・感覚主義的な、つまり上述の立場とは対極的な方法論的態度である。この態度とは、物体の世界が純粋な延長関係として、すなわち思考するものまたは内面性から切り離されたものとして現出することは本来ありえず、「物体において機械的・計量的には理解されないままに残るもの、つまり、物体の諸性質が現出のうちで質をそなえているということは、現出の状況から、物体が思考するものと一緒に存在するということから、思考するものの助けを借りて導き出される」⁽⁶⁾と考える立場である。ここから、思考するものは延長するものに先立って配置されていなければならない、とするいわゆる内在哲学が生ずることになる。

さて、思考するものにとっては、物体がもつ諸性質は物体の核心 Kern を包んでいるという外見をとるとともに、こうした核心に先立って先行的に配置されているという外見をもとめるが、こうした外見をとること自体、思考するものと延長するものとが接触を保っていることの中に根拠をもっている。内面性は、思考するものとして、単純に延長するものとしての物体に対立しているのではない。「思考するものは延長するものに先立って配置されて vorgelagert いなければならない。それゆえに、延長するものは、そのようなものとしては、決して剥き出しの状態で現存しているのではなくて、現出という『外被』をまとってのみ現存している。」⁽⁷⁾「延長するものはたんに質のシステムとしてのみ現在のであるにすぎないから、思考するものという唯一の反対領域は、このシステムの現在がもつ『何に対して』 Wogegen とならねばならず、このシステムの所与性の（先行的に与えられた）関係領域とならなければならない。だから、物的な現存在は内面性に対してのみ現出する。内面的な存在は、自然的な客体に先行的に配置され、先行的に与えられ、自己 das Selbst は現出する物体世界に先行的に接続されている。」⁽⁸⁾

「現出するものは、私の自己の内容であり、意識内容であり、表象である。私自身の先行配置性が、現象的世界を可能にするための内面性の先行所与性 Vorgegebenheit としての、まだ存在的な先行配置性から生じたのである。」⁽⁹⁾これがプレスナーの言う内在の法則の意味でもある。ここではプレスナーは、ほとんどフッサールの発想と語法で語っているが、こうした現象学的な分析視角は同時にいわゆる内在哲学とも通底することになる。

ここで、内面性、自己という概念が登場していることに注意されたい。内面性にかんしてプレスナーは先立つ箇所でもう述べている。「心的ということと思考するものとの意味が一致しないとしても、両者の概念は同じ領域に照準を定めている。この領域を示すのにさしあたって例外なく役立つのは、内面性 Innerlichkeit という特種にドイツ的な言葉である。この言葉によっ

て、心的なもの、意識、主体の本質性にかんする仮決定が避けられるのである。」⁽¹⁰⁾ 自己についてはいこう記されている。「自己 Selbst というものは、自己（作用、純粋な眼差し、コギタティオ）『から』出て、還帰として自己（作用の遂行中心としての自我、眼差しの送り手、思考するもの『へ』と進展するという二重のアスペクトのうちにある。」⁽¹¹⁾ それでは自我はどう定義されるのか。「自我 Ich とは、起点となる自己（作用）と還帰する自己（作用の中心）との対置を通じた生きた統一であり、しかもこの分裂を両者の揚棄として遂行することである。」⁽¹²⁾ これにさらに、再帰的自己 Sich、自己としての自我、自我としての自我などの諸規定が絡み合って関連してくるから、事態はきわめて複雑で、不明瞭である。プレスナーは後に論ずるように、自己という概念をきわめて広くとり、有機的生命体そのものが外部世界または環境世界との相互作用のなかで生命の営みを行うということから、個体的な生命そのものが自己の形式をそなえているとみなし、動物にさえも自己を自己自身に関係づける再帰的自己 Sich の存在を認めている。思考するものが自己へと拡張されることによって、非意識的ではありながら自己をもつ生命体が哲学的な分析の射程のうちにとらえられる。しかし、これらの諸概念の区別と関連については後に考察することにして、ここでは内面性という概念が、こうした文脈のなかでは、生命世界における生きたものどうしの普遍的連関を意識しながら、心、意識、主体、思考、自己、自我、そして内部世界などの関連する諸概念を含み込んだ、これらを統一的・普遍的に表示しうる概念であることを確認しておけば十分であろう。

以上に概観した、こうした内面性とそれの外部世界または客観にたいする先行配置性の把握は、プレスナーをして「方法的感覚主義」の立場へと導くことになる。その基本的な原理は、世界が内部世界と外部世界とに分岐していること、内部知覚と外部知覚とがたがいに橋渡しされえないこと、外部知覚と物理的客体、内部知覚と固有の自己とが結合しあっていること、外部知覚はあくまでも間接的であること、外部世界は感官諸感覚へと還元されるという感覚主義などである。人間主体の内部世界と外部世界との合流点である感覚にかんするプレスナーのこうした議論は、他我の到達可能性を否定することに象徴されるあの独我論的なアプローチに限りなく接近してゆくかに見える。

ところで、こうしたプレスナーの見方からすれば、自我と肉体との関係はどのように規定されるのか。われわれの現存在の経験的解釈はある暗黙の前提に従っているが、それは「自我自身が私の肉体の『なかに』あり、私の肉体が私の自己を『包み込んでいる』という前提である。自分の肉体は、まったく物体世界のひとつに数えられるというわけではなくて、同時に物体世界にたいする自我の境界として、内面性の周辺部として取り扱われる。」⁽¹³⁾ この場合、自我主体としての私と私の肉体とのあいだにはきわめて顕著で本質的な差異がある。自己とは、これまでの考察によれば、すべてのものが収斂してゆく当のものであって、非延長的なものである。自己は「純粋な客体として考察するならば、私はある任意の空間的場所を満たすが、自我主体としては本質的に『ここ』にある。…自我主体の『ここ』という性格を、自我主体にぞくして

その本質を構成している契機として固持するということは避けることができない。そのかぎり、自己は『ここそのもの』 das Hier なのであって、『ここ』のなかにはいるのではない。⁽¹⁴⁾これに対して「肉体は、私の肉体としては、いつもここにあるが、それにもかかわらずけっして『ここ』自体ではない。」⁽¹⁵⁾自己は空間を所有し、空間を制約し、その意味で空間具有的であるが、肉体は空間を所有せず空間的に存在し、空間的に制約されている。延長するものとしての肉体は、自己にぞくし、自己によって所有されるとともに、自己の内部知覚にたいして素材を提供するというかたちで、自己の外部に存在する外部世界を自己に媒介している。したがって、「内部から感知されうる、インパルスから見れば多かれ少なかれ意のままにされうる、外部へと向けられた、部分的に外部として与えられたシステムの中心は自我であり、このシステムの内部的な多様性は諸作用と諸表象の『おたがいのなかへと』 Ineinander まったく溶かし込まれたかたちで現出し、このシステムの境界面は対象性にもかかわらず（それゆえに、対象性をもつ表象の本性にもかかわらず）、内部からして感覚・運動野の意義を示すとともに、知覚作用とインパルス作用とが流入・流出する圏域という意義を示している。そのようなシステムとして肉体は、自己自身が、内部世界から外部世界へとかかっている、これまで探し求められてきた懸け橋であることを認識させる。」⁽¹⁶⁾

結論を要約しよう。プレスナーはデカルト派の延長と思考、物体性と精神性、身的と心的、外面性と内面性との分離を、ともに感覚と結合した次のふたつの方向性で突破しようとする。そのひとつは、いわば認識論的な方向性であって、方法的感覚主義の立場に立って、肉体と自我とがおりなす境界データであり、心身的に無差別な「感覚」に注目することによって、これらふたつの対立をひとつのうちに包含した二重アスペクト性がこの現象領域のいたるところに貫かれていることを示すことである。もうひとつは、いわば存在論的な方向性であって、ユクスキュルの環境世界説を摂取することによって、生物の世界においては主観的世界と客観的世界とが刺激と反応の行動図式を通じて密接に連結されていることを示すことである。プレスナーによれば、これらふたつのいずれもが、デカルトおよびデカルト主義の限界を露呈するとともに、これらとの対決を必要とするのである。

(2) ユクスキュルの環境世界説をめぐって

周知のように、ヤーコプ・フォン・ユクスキュルによって提起された生物の環境世界とそのなかで作用していると考えられた自然の目的・計画および秩序の研究は、動物と人間との差異および類似性にかんする当時の最先端の科学的知見を提供したことで、ヴォルフガング・ケーラーによるチンパンジーの知能研究と並んで、当時の西欧の知識人の人間観および世界観に多大の影響を与えた。ユクスキュルによれば、すべての生物はおのれを取り巻く固有の環境世界をもち、そのなかで生物主体は客体とのあいだの不断の相互交渉または相互作用のうちであり、生物ごとに異なりはするが、知覚標識の担い手である受容器と作用標識の担い手としての実行

器をもち、特定の刺激に対して特定の反応と行動とを連結するという機能環の図式をもっている。生物主体は、単純な段階から複雑な段階へといたる程度に応じて、こうした機能環の図式を通じて、客体との関係において、環境世界に適應している。知覚世界と作用世界とがまとまりのある統一をなしていることが、動物にこうした図式にもとづく行動の正確さを保証する。彼はこうした考え方にもとづいて、動物ごとに異なる固有の環境世界を、動物主体の側から見た環境世界がどのような構造をなしているか、そして動物自身の知覚世界に環境世界がどのように映じているかを含めて、環境世界研究のテーマとしたのであった。彼のこの研究はそのほかにも、体験のトーンというかたちで主体というカント的視点を生物研究に導入して、現代生物学の行動研究にひとつの突破口をもたらしたし、また機械論と生氣論という伝統的な生物学内部の論争と対立にも一定の視角と方法によってこれを克服する方向性を示した。

このユクスキュルの環境世界説は、哲学的人間学の創始者マックス・シェーラーの人間学のなかでも大きな役割を果たしている。シェーラーにとってはこの説は、動物が環境世界のなかで作用している行動図式によって束縛され、制限されていることを示しており、自由な存在である人間の世界開放性と決定的区別されるものとして、動物と人間との間を質的に、すなわち知能の程度の量的な差異によってではなく、行動様式の決定的に質的な差異によって、非連続的に区別するものとして、格好の根拠を提供すると思われた⁽¹⁷⁾。また、そればかりか、この説は原理的に哲学的人間学に対しては一貫して批判的であったハイデガーの思想にも一定の影響を与えずにはおかなかった。その痕跡を、われわれはハイデガーの『存在と時間』のなかの例えば次のような叙述のなかに見ることができる。「今日では、『人間はおのれの環境世界をもつ』という言い方がしばしば用いられているのだが、この言い方は、この『もつ』ということが無規定的にとどまっている限り、存在論的には何ごととも言っていない。『もつ』ということの基礎は、その可能性から見れば、内存在という実存論的機構のうちにある。こうした在り方を本質上とする存在者として現存在は、環境世界的に出会われる存在者を表立って暴露し、そうした存在者に通暁し、そうした存在者を意のままにし、『世界』をもつことができる。…生物学において——なかんずくK・E・フォン・ベア以来ふたたび——環境世界 Umwelt というこの存在機構を哲学的に用いるのは『生物学主義』であると結論してはならない。」⁽¹⁸⁾したがって、プレスナーが例えばユクスキュルとハイデガーとの関係について「擬人化されたアナロジーを一掃したことは、ユクスキュルと現代の行動研究の功績であった。動物の行動とく世界—内—存在>という観念の発掘は、人間の行動を理解するための前提をなしている」⁽¹⁹⁾と述べているのは、決して偶然でも、根拠のないことでもない。

さてプレスナーは、ユクスキュルの環境世界研究が、ともすれば動物の行動を擬人的に理解したり、心理学的諸概念に頼って内部世界を想定したりする従来の動物心理学の水準を完全に超えて、また生命過程が自動的機構なのかそれとも自発的機構なのか、したがって機械論かそれとも生氣論かというあの大きな問題をさしあたりそのままにしておいて、環境からの特徴的な

刺激とこれに対する特徴的な反応によって確定される、動物ごとに異なる構成計画を、われわれに感性的に知覚されうる諸要因という認識手段から説明しようとする科学的プログラムを提示したことを高く評価する⁽²⁰⁾。そして、彼は動物の領域における生命の位置形式を論ずるさいに、ユクスキュルの環境世界理論を援用し、自らの教説を補強している⁽²¹⁾。

しかし、プレスナーは、ユクスキュルのプログラムを最大限綱領と考えて動物心理学または比較心理学の諸問題をすべて刺激生理学と運動生理学の諸問題として処理しようとは考えていない。プレスナーによれば、動物主体と環境客体とのあいだの刺激と応答の統一は、もちろん有機体の肉体だけにぞくするのでも、この有機体を取り巻く環境客体だけにぞくするのでもない。こうしたふたつの領域の統一は、外界からの特定の刺激にたいして内的世界が反応するための「先行所与的な」枠組みにほかならず、ここでも問題は感性的な知覚にかかわることになる。ユクスキュルはこの統一を「生命計画」と名付けているのだが、プレスナーは、この生命主体と世界との関係を支配している合法則性が提起されたとすれば、その次に探求されなければならないのは、「生命のそのような計画諸形式または生体諸カテゴリーは、有機体にたいしても、有機体と相関関係にある環境世界にたいしても、等根源的に『先行的に与えられて』いるものであるか、もしくは有機体の理念として、現存在の両方の圏域にそれらの決定的な特徴を与えているものであるか、これらの形式またはカテゴリーの証明は、どのような外見をとっているのか⁽²²⁾」という問題である。彼によれば、こうした問題は、経験的に探究しうる範囲を超えた、ア・プリオリな領域にぞくする。「ここで、経験的な生命計画研究の管轄範囲はおしまいになって、生体諸カテゴリーの分析が開始される⁽²³⁾」と彼は述べて、ユクスキュルの前提をさらに突き抜けて、ア・プリオリな諸前提にまで突き進もうとする。「ユクスキュルは、有機体-環境の関係が、正道に戻った動物心理学（生物学、生命計画研究）の研究分野であると宣言した最初の人であった。だから、この新しい科学は彼を超え出ている⁽²⁴⁾」とプレスナーが言うゆえんである。プレスナーの位置性の理論は、生物主体と環境との相関関係を示す彼独特の中心概念であって、この中心概念は、生命が環境と相対するという平面において成立する以上、先に述べた意味においてユクスキュルの環境世界説が指示する生物の行動図式なしには成立しえなかったものであろうが、プレスナーはユクスキュルの学説に依拠しながらも、決してそこにとどまっただけではない。すなわち彼は、生物学のたんなる経験的な研究の範囲内にとどまるのではなく、さらにこうした有機体の行動図式、または有機体と環境との構成計画を可能にしている諸条件にまで分析を深化させようとする。ここに、動物学者プレスナーから哲学者プレスナーへの決定的な移行があり、また哲学者プレスナーの独自の人間学の思想と発想がある。

プレスナーがいう非経験的な探究とは、生物学的に探究しうる生命計画を可能にしている諸条件を探究すること、いいかえれば動物主体と客体との行動図式との関係を可能にし、これを規定している諸条件を探究することであって、プレスナーによれば、こうした諸条件を表現する

生体的な諸カテゴリーと諸形式とは、カントに倣っていえば、ア・プリオリな可能性の諸条件なのである。「もし生命の〈何であるか〉形式にもとづき、生命の本質構造にもとづいている、生物と世界とのあいだの連関の諸法則が存在することが、つまり協調、協和、等根源的な形態化の諸法則が現実存在することが、それゆえに素材から見ればア・プリオリな諸法則が存在することが明らかにされなければならないとすれば、その場合には、これらの法則がカテゴリー的諸法則の価値を持たなければならないということもまた、証明されている。」⁽²⁵⁾

ここであらかじめ言うておけば、有機体とその環境とのあいだの深い層のなかに現実存在する、意識をも意識以前の段階をも含めた、生命の諸形式・諸カテゴリーとは、例えば有機体とその環境とが構成する位置性にほかならないのであるが、これらがア・プリオリだというのは、次のような意味においてである。カントによれば、純粋な形式である諸カテゴリー（範疇）は、経験の可能性を構成する諸条件であって、例えば原因と結果とのあいだに成立する因果律はその正当性を経験によって証明されるものではなく、一切の経験と思考と行為との根底にあってこれらの規制的原理として作用するという意味でア・プリオリである。これと同じような意味で、プレスナーのいう生体諸カテゴリーおよび生命諸形式とは、一切の生命現象を可能にする諸条件としてア・プリオリなのである⁽²⁶⁾。そして、このような意味において、「考えられる動物『心理学』にとっても基礎的な学科である、生命の本質諸法則の科学としての哲学的生物学の課題は、そのような生命諸カテゴリーを体系的に基礎づけるということにある」⁽²⁷⁾と彼は言う。プレスナーがあげるそのような生命諸カテゴリーとは、例えば、有機体と環境世界との「おたがいに向かって」 das Zueinander と「おたがいととも」 das Miteinander である⁽²⁸⁾。これらは、意識以前の生体諸カテゴリーにもとづいて成立しているとされる、有機体と環境世界との位置的・形式的関係を表現するプレスナー独特の概念であって、やがてこうした議論の延長線上にプレスナーが言う位置性の理論へと総合されることになる。

ところで、ユクスキュルがいかかわしいと宣言した意識と意識研究とは、プレスナーによってどのように位置付けられているのか。プレスナーは「意識とは、生物が自己確定しながら環境にたいしてとっている行動の根本形式、根本条件であるにすぎない」⁽²⁹⁾と述べているし、また、動物心理学に敵対的なユクスキュルのプログラムに反対してヴァスマンが少なくとも「見る、聞く、触れる、嗅ぐ」などといった表現の科学的な正当性を主張しようとしたことを擁護し、「意識性のこれらの様式は、生きた行動の諸様式であるとともに、諸条件なのであって、この生きた行動は、身体固有のシステムと環境世界とのあいだの分裂に橋渡しすることを意味する」⁽³⁰⁾とも述べている。要するに、意識性および意識研究も、生命体と環境世界とのあいだの相互交渉という位置的關係のなかで解明され、位置付けられるのである。そしてプレスナーは、人間をも含めた動物の生きいきとした行動・振る舞い・挙動など、ゲシュタルト的性格をもったものの研究、すなわち「生きいきとした行動の表現学」⁽³¹⁾の余地を動物心理学に残すのだが、このことと例えば「身振り表現の解釈」などにかんするプレスナーの解釈学的な研究の

可能性とが重なり合っていることは明らかであろう。

そうすると次に、こうした哲学的生物学と哲学的人間学との関係はどのようなものであるべきか、が問題となろう。これにたいするプレスナーの答えはこうである。「人間を担っているのは生きた自然であり、人間は、精神化にもかかわらずこの生きた自然のとりこになったままであり、どんな昇華のためにも力と素材とをこの生きた自然から手に入れる。そういうわけで、哲学的人間学にたいする要求はおのずから、哲学的生物学にたいする要求を迫っており、生命の本質諸法則または諸カテゴリーの学説にたいする要求を迫っている。」⁽³²⁾ こうした視点と課題意識のもとに、プレスナーの人間学の基礎としての哲学的生物学は展開されるのである。

(3) 二重アスペクト性の提起

デカルト的な思考と延長との二者択一原理を拒否するところに成立するプレスナーの哲学的人間学は、やや具体的に言えば、「たんに存在にぞくするだけではなくて、存在を何らかの意味で世界として所持もし、存在とともに、そして存在に対立して生きているのが、世界の『生きた』事物なのだ」⁽³³⁾ というかたちで表現される、生命および自己なるものの二重アスペクト性の提起をもって開始される。しかし、プレスナーは、自然科学的な経験から出発することがすでにデカルトの二者択一原理という思考の枠組みのなかにすでにはまり込んでいることにはほかならなと見なし、また彼自身が『感性の統一』で行ったように、所与の客観的な形成物から批判的にその諸条件を明らかにするという、精神科学的な経験から出発するというやり方をもここでは採用しえないと考える。だがもし、彼が言うように「この方法が決して経験からは出発しない」⁽³⁴⁾ とすれば、また彼の研究対象が「経験に先行し、経験に責任を負っている諸条件および着手点」⁽³⁵⁾ であり、一般的に言って経験の可能性の諸条件であるとすれば、彼が言う新しい方法とは定まった対象をもたないものとなろう。そこで、プレスナーの人間学の体系的な展開はその端緒からして錯綜したものとならざるをえず、われわれの日常的な理解を超えたものとならざるをえない。だが、そのいわんとするところは、生命体一般にかかわる内部世界と外部世界、生命体と環境世界、自然と意識、思考と延長などの対立的諸規定が対立しているにもかかわらずおりなしている交差の関係に象徴される二重のアスペクトを可能にしている形式的諸条件、言い換えればこれらの存在の差異を超えて共通に貫いている形式的諸条件を提示することにあるであろう。

プレスナーのテーゼは、知覚物の現出の仕方または様式の二重アスペクトの考察から、いきなり開始される。いかにも謎めいていて唐突に見える彼の立論を理解するためには、若干の注釈が必要である。

プレスナーの分析はまず、空間的なアスペクトとしての内部・外部関係と非空間的な内部・外部関係を区別することから叙述を開始する。例えば、壺には壺の外としての空間的な外部と壺の内側としての内部とがあって、両者は方向が対極的であるにもかかわらず、方向転換をお

こなうだけで、内部が外部となり、外部が内部となる。これは両者が空間的なアスペクトとして一致しているために、たがいに移し変えたり、転換されたりしうるということを示している。カントが例としてあげている手袋も裏返しされることによって内部と外部、左と右の方向の対極性を克服しうる⁽³⁶⁾。しかし、われわれの身体的なものと心的なものによって代表される原理的に分岐した領域は、とりわけ内部的な領域としての心的なものが非空間的であることからただちに了解されるように、一方から他方へとたがいに移し変えられたり、転換されたりはしない。したがって、われわれの身体的なものと心的なものとを扱うさいには、これらと空間的な内部・外部関係とを安易に比較してはならない。前者のうちとりわけ心的なものとしての内部は空間的に制約されず、むしろ空間を制約するものだからであり、後者のように空間的 *räumlich* なものではなく、むしろ空間具有的 *raumhaftig* なものだからである⁽³⁷⁾。さらに、われわれはわれわれ自身の物体としての身体を所持することによって、心的な内部とこれから切り離された空間的外部とを媒介する、それ自体としては空間的な外部をも所持している。

われわれの知覚の対象となる物は、こうした関連のもとでは、二重のアスペクトにおいてわれわれに現出する。もちろん、プレスナーは知覚物とその現出、すなわち対象が現れ出てくる具体的な体験を分析するさいに、たんなる物理現象とその知覚における鏡像的反映という自然科学主義的または自然主義的立場にではなく、意識の志向性とそれを中心とする直接的な体験にそくした知覚の在り方とを探求するフッサールの現象学の立場に立っており、そしてこの立場から、われわれの知覚対象の自発的構造化、さらには知覚の事物構成的またはゲシュタルト的性格さえも視野に入れながら、接近しようとしている。この錯綜したプロセスをプレスナーは大略において次のように叙述している。

例えば、私の窓の外に立ち木が立っているとしよう。その場合この立ち木は、その幹が「ひび割れている」とか、木の葉が「緑色」であるということをはじめとするさまざまな感性的データのたんなる総和ではない。むしろわれわれは、あるゲシュタルト的なものを通して感性的データを包み込むようにして知覚しながら、この立ち木が感性的に確認されうるさまざまな諸性質の担い手であって、これらの諸性質は実体としてのこの担い手に依存している、つまり立ち木そのものがこれらの諸性質を所持していると見なす。このようにして、諸性質としてとらえられた感性的データは、物の核心実体となる中間的中心 *Mitte* に結び付けられたものとして示される。物核心 *Dingkern* はここでは物の存在の「回転軸」と考えられている⁽³⁸⁾。しかし、われわれにとって対象はパースペクティヴにおいて、したがってまた一面的に現出せざるをえず、感性的データは物の核心および中間をあますところなく現出させはしないし、物全体も一度に現象しはしない。プレスナーによれば、具体的な物現出にはふたつの「侵入」 *Transgredienz* の方向がある。それは「つまり、現象から物『のなかへ』入った侵入と、事物のまわりを『回った』侵入である。第一の方向は物の実体的な核心を目指しており、また第二の方向は可能なそのほかの物の面をめざしている。こうした二重のまなざしの遂行は、実的な形象が現在のな物

として知覚されなければならないとすれば、この実的な形象にぞくする。そして、こうした二重の方向をもったまなざしを与えることではじめて、空間的に感性的な諸現象は、諸側面の核心具有的に秩序づけられた統一として、物として現出する。⁽³⁹⁾ プレスナーによって「奥行き具有性」および「側面具有性」と名付けられるこうした関係は、一方では知覚の方向がたえず物のなかへ、すなわち物の実体的な核心の方へと先取りされ、他方では物の周囲へと、すなわち物のそのほかの可能な諸側面へと向かうのであるが、この関係は空間的な関係であるかに見えながら、その実は客観そのものにぞくする限界性としてのアスペクト性にもとづく物構成的な諸契機にほかならない⁽⁴⁰⁾。

ところで、どの物物体の直観形成物もまさしく非空間的に解釈される内部と外部の二重アスペクトにもとづいているが、「対象はけっして現象することのない内部、すなわち、けっして外部となることはない内部と、けっして核心内容となることのない外部とのこうした分裂で崩壊してしまうのではなくて、まさにこの分裂によって、対象の典型的に物的な統一へと形作られる。」⁽⁴¹⁾ プレスナーによれば、こうした関係は、すべての諸問題を原因であるところの諸要素へと還元しようとする自然科学の精密で計算的な方法によってはとらえられず、ただ直観的に体験されるべきものである。「外部・内部関係において一般に問題となるのは、真のアスペクト分岐であって、外部的なものの相対的な秘匿性という関係ではないのだが、このことは哲学的な熟慮によってはじめて理解できるようになる。二重アスペクトは、物物体の直観形成物を成立させるが、しかし、真の条件として、二重アスペクトによって制約されているものうちでは消滅する。」⁽⁴²⁾ したがって、次に問題となるのは、外部・内部関係が对象的に、対象を制約しながら、直観そのものの像のうちに現れるような知覚物を見いだすことである。こうした知覚物とは生命ある知覚物にほかならない。こうして問題は、生命ある物と生命のない物とをどう区別するかという問題へと移行する。

生命ある物と生命のない物との原理的区別という根本問題の急所にかんして、プレスナーはこう言明する。「原理的に分岐的な外部・内部関係は、直観の物的な物にぞくして、この関係の存在にぞくしつつ对象的に現れるのだが、こうした物が生きていられる。」⁽⁴³⁾ つまり、生きたものは、非空間的な内部または内面として表現されるものと空間的に現れる外部または外面として表現されるものとのおたがいに転換されえない原理的な分岐を保持しながら、こうした二重アスペクトの統一として、決して明示されることのない内部・内面的なものを外部・外面的なものとして現出させながら、われわれの目に見えるものとなる。このプレスナーの主張は、内面をもたない外面として生命体または生物一般に接近しようとする試みにも否定的であり、また外面をもたない内面としてのみ人間をとらえようとする主観的なアプローチにも否定的であって、こうした生物学的・人間学的な根本的な視角にかかわる問題提起を含んでいる⁽⁴⁴⁾。もちろん、こうした問題提起だけではまだ生命あるものもつ二重アスペクト性を可能にする条件を取り出したことにはならない。この二重アスペクト性はどのようにして可能なのか。

こうしてプレスナーは自らの生命哲学の基礎理論としての「境界」概念に到達することになる。しかし、この概念の本格的な展開の前に、生命あるものとそうでないものとの根本的・原理的区別にかかわるひとつの重大な論争点に決着をつけておかななくてはならない。これが機械論と生氣論とをめぐるゲシュタルト問題として提起されたケーラーとドリーシュとの論争である。

(4) ケーラーとドリーシュの論争；機械論と生氣論との対立を超えて

周知のように、ゲシュタルト心理学のなかでもベルリン学派の代表的論客であったヴォルフガング・ケーラーは、テネリファにおけるチンパンジーの知能実験にかんする有名な報告書を公刊して名声を博したあと、一九二〇年の著作『静止および定常状態における物理的ゲシュタルト』のなかで、心理学的なゲシュタルトがエントロピーや最小エネルギー構造などのかかわりにおいて物理的諸現象にも適用できることを主張し、続いてさらにこの著作で展開した彼の理論を、二年後の一九二二年の論文「ゲシュタルト諸問題とゲシュタルトの端緒」のなかで、有機的なものの諸問題、とりわけ生物学的調整作用にも適用しようと試みた。そして、ケーラーは有機的なものの全体性が無機物を含めてゲシュタルト問題として解決しうることを主張し、彼のゲシュタルト理論が有機的なものと機械的なものとの両方に通用しうるものだというを示そうとした。そのさいに彼は、全体が諸部分の総和には還元されはしないという自説を間接的に指示するものとして、全体性論者および新生氣論者として知られるドリーシュの学説を引き合いに出して、さらにドリーシュを生氣論からも救い出そうとさえしたのだが、そのことが結果として、ドリーシュからすれば自分を生氣論から引き離し、そして機械論またはゲシュタルト理論の水準と同一視する見解だと受け取られたと思われる。例えば、ケーラーはこう述べている。「ひとつの部分の機能が、その部分が置かれている全体のなかのその位置によって規定されており、逆にたんなる総和としての全体における生起が諸部分のなかのそれだけとれば必然的な出来事の総体から生ずるわけではないこと、このことはすべての機械的なものを超えているように思われるし、したがって、精密自然諸科学はうまく関連が秩序づけられた生起にもとづいて理解させうるものをすべて超えているように思われる。

ドリーシュは多分そうすることによって、極端な機械論に対して説得力のある議論を提起したのだが、しかし、完全に生氣論に味方してそのような議論を提起したわけではない。というのは、ひとつの部分の諸性質と諸機能は部分がぞくする全体のなかで部分が占める位置に依存するということは、いわゆるゲシュタルト理論が取り扱っているような——無機的でもある——すべての形成物の根本性質だからである。ところでまさに機械が少なくともそのことを示している。したがって、生氣論的な思考行程には大きな裂け目が口を空けている。ここに驚くべきことがあるとすれば、生命の特殊な性質が問題になるのではなくて、自然一般のずっと一般的な性質が問題となる。そして、その性質をドリーシュは展望したのである。⁽⁴⁵⁾

こうしたケーラーの見解に対するドリーシュの批判は、一九二五年になって彼の論文「『物

理的ゲシュタルト』と有機体」のなかで展開された。ドリーシュはまず、ケーラーが「そして結合」Und-Verbindung, 統一 Einheit, 全体性 Ganzheit という諸概念を事柄にふさわしく区分していないと述べながら、「それゆえに、総和的 summenhaft であるとは、統一的ではあるが、しかし全体的ではない、ということであった。そして、このことはまたしても、諸部分の動態的な諸ポテンツを含めて、諸部分の知識からなる総体性 Gesamtheit として理解されるということであった」⁽⁴⁶⁾と主張した。ケーラーは、メロディーであろうとそのほかの例であろうと、ひとつの要素にそのほかの要素を付け加えていって生ずるゲシュタルトは、諸部分のたんなる総和ではなくて、諸部分を超えた、そしてたんなる総和を超えた全体性であると主張したのだが、ドリーシュは、ケーラーの言う全体性とはたんなる統一、またはせいぜいのところ総体性にほかならず、結局のところ、諸部分のたんなる総和を超えた物理現象が存在することを認めるとしても、この物理現象は有機的な全体性と決して同じではないし、無機物における統一または作用統一は決して生命あるものの全体性とイコールではない、と言うのである。彼によれば、生命あるものの全体性とは、再生、発達、遺伝、行為など、生命性の特種な諸性格のうちに表示されるとともに、こうした生命の自己活動に内在してこれを統合するものなければならない。こうした諸性格は、最終的には決して機械的または物理・化学的な生起へと還元されはしないし、たんなるゲシュタルトを超えた秩序形式にもとづいているとしか考えられない以上、そこには無機的全体性と有機的な全体性とを分かちとともに、生命あるものに特有の自己活動性を保証するある種の要因が想定されなければならない。これがドリーシュのいうエンテレヒー Entelechie にほかならない。以上に述べたことが、ドリーシュとケーラーとのあいだで行われた、機械論と生氣論をめぐる論争の大ざっぱな経緯と内容および背景である。

この論争は、プレスナーからすれば、従来しばしば見られた「機械論か、それとも生氣論か」という二者択一の問題提起を超えた、もっと次元の高い新しい立場を要求するように思われた。プレスナーは、ケーラーの提起したゲシュタルトが、空間的に結合された構成材料と先行条件をもちながら、いったん干渉を受ければ、与えられた可能性の枠内でその内的動力学に従って自発的に原状回復するという事実注目し、ここには生氣論者が生命現象をたんに機械的に説明することはできないという論拠をもちだすだけでは反論できない、やはり重要な問題提起がなされていると考える。プレスナーは、先にあげた生命性の独自の性格にぞくするように見える諸現象さえもが物理・化学の急激で長足の進歩によって無機的物質の法則性によって説明されるということがもはや時間の問題であることを意識していただけてはなくて、例えばコロイド化学や結晶の形成に見られる全体的構造と反応様式の事例は、もはや物理的ゲシュタルトと生命の全体性とのあいだに決定的な区別をなしえない可能性があることを意識していた。しかし、それでもなおプレスナーは、生命あるものの自律が機械論によって完全に説明されるとは考えてはいなかったが、そうかといってドリーシュのいわゆるエンテレヒーが精密科学的な実証に耐えうる説明原理であるとも考えてはいなかった。

プレスナーはすでに、一九二二年の論文「生氣論と医者の思考」のなかでドリーシュと彼の生氣論を批判的に論評していたが、その論調は例えば「ドリーシュが証明したことは生氣論ではなくて、生物学的諸過程にかんするわれわれの現在の知識の状態からして機械論が不可能だということである」⁽⁴⁷⁾、「自然科学において認められる諸概念は、それらを用いて仕事を行うことができるものだけである。しかし、ドリーシュが作用を詳細に説明した…にもかかわらず、エンテレヒーの概念で仕事をすることはできないのである」⁽⁴⁸⁾などの箇所にも明らかである。プレスナーは『諸段階』においても「ドリーシュもまた、彼が機械の概念をあまりにも狭く解釈したことによって、どうしても精密分析という方法的なルールを無効にせざるをえず、非エネルギーゲティックな諸要因へと逃げ込まざるをえない、ということに気づいていた。どんな測定可能性をも原理的に拒否するはずの自然要因であるはずのエンテレヒーを導入したことで、支持されるはずのない一時しのぎの解決策だけが考え出されたが、この解決策は自己矛盾にはかならなかった」⁽⁴⁹⁾とはっきりと述べているし、生命過程に内在する発展要因について述べたそのほかの箇所でも「この自己操縦は後から a tergo という無媒介な操縦ではなくて、前に a fronte という媒介された操縦である。だから、この媒介された操縦は、過程に含み込まれた事物そのものにはぞくさないものへと、つまり外部からあてがわれた要因、すなわち生命力またはエンテレヒーへと還元されてはならない」⁽⁵⁰⁾とされているとおりである。

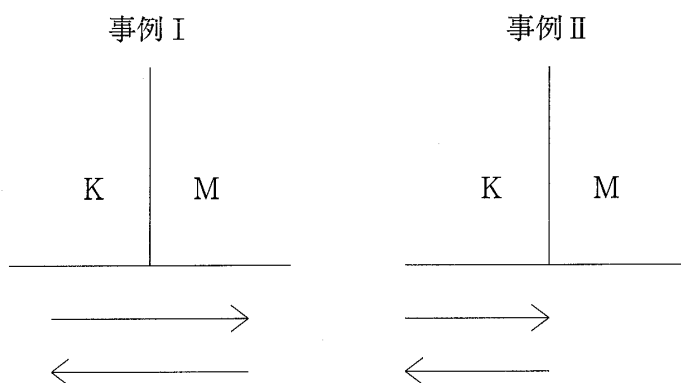
しかし、プレスナーはここでもケーラーが行ったような「生命的な全体性諸現象のゲシュタルト理論的な説明はまだ正しいとされるべきではないし、またドリーシュが多大の貢献を行ったテーマそのものは見失われるべきではない」⁽⁵¹⁾と述べて、いずれの側にも直接に与することなく、対立しあうそれぞれの学説から現代生物学に継承しうるプラスの側面を取り出してこれらをいっそう高い次元へと揚棄しようとする。プレスナーはいま一度自問する。「生命性の(すでに直観的な現象のなかにはっきりと現れている)優位は、ゲシュタルトを超えた秩序様式にもとづいているのか」⁽⁵²⁾、と。もちろん、この問いにたいするプレスナーの答えは肯定的であって、この点ではドリーシュ的である。そうだとすれば次に来なければならない問いは、それはどうしてか、そして無生物と生物とを区別しうる本質的諸形式は何か、生きた事物は何によって、またどの点で生きた事物と呼ばれるのか、という生命性の根本にかかわる深刻な問題提起である。プレスナーはこれらの問いに対して、機械論と生氣論のいずれにも与せず、かえってこれら両者を超えて揚棄する、彼独自の第三の道を開拓せざるをえなかったのであるが、この問題に対して一群の解答を用意しうる最初の手掛かりが、彼独自の人間学の基本的な理論装置である「境界」の概念にはかならない。

(5) 境界の概念と生命あるもの

境界 Grenze とは、一般的に言えば、事物の有限性にもとづく空間的な限界であって、有限な事物がそこで空間的に途切れるところの区切りであるとともに、同じく有限な他のものと接し

ながら、同時にこの他のものが始まる場所の境目でもあろう。したがって、ヘーゲルも言うように、或るものはおのれの境界をもつことによって他のものと区別されると同時に、おのれの境界を超えてはそれ自身ではありえないから、境界とは他のものの非存在であるとともに、或るものの非存在でもある⁽⁵³⁾。境界は、たとえ無機物であろうと有機物であろうと、その事物が有限であるかぎり、その事物がもたざるをえない固有の制限である。

ところでプレスナーによれば、境界づけられた事物がおのれの境界にたいしてとる関係には、さしあたり次のふたつが考えられる。プレスナーはこの関係を次のような図式で表現する。



この一見したところ奇妙な図式についてプレスナーはこう説明する。「Kは境界づけられた物体 Körper を表し、Mはこれと境界を接する媒体 Medium を表す。図 I は、KにもMにもぞくさないか、またはKにもMにもぞくする境界の『空虚なあいだ Zwischen』を象徴している。図 II では、この<空虚なあいだ>がなくなっている。境界が境界づけられた物体 [肉体] そのものにぞくしているからである。矢印の組み合わせは、これら両方の事例のあいだの区別を表現している。つまり、事例 II の『絶対的な』境界づけが、事例 I の K と M の相互的な境界づけに對立している。⁽⁵⁴⁾ さらに次のような説明が続く。事例 II には $K \leftarrow Z \rightarrow M$ という公式があてはまる。境界は K と M のあいだ Z にあり、K にも M にもぞくさない (またはぞくする)。Z は純粋に潜在的なくあいだ>である。事例 I には $K \leftarrow K \rightarrow M$ という公式があてはまる。境界は K そのものにぞくし、K が K そのものとは他者との境界である。そのかぎり、K は K そのものにも他者にも對向している。これは境界が逆方向で関係することを意味し、また「自らを超えて存在する」、「自らに對向して存在する」という、生物一般がもつ二重のアスペクトでもある、と⁽⁵⁵⁾。

われわれはここで、プレスナーのこうした叙述が經驗的に理解される具体例をほとんどあげずに、しかもとうてい行き届いているとは言い難く、あまりにも簡素なかたちで行われているのを目のあたりにして、ほとんどまったく途方に暮れてしまうであらう。われわれは、プレスナーのこのきわめて難解な説明が言わんとする核心的部分を理解するためには、ア・プリオリ

主義にこだわり続けるプレスナーのこうした説明方式をいったん括弧に入れて、これから身を退けて、そのうえで有機的生命の根本現象を示すいくつかの具体的事例をあえてヒントにし、そこからさらにこの説明の当否を再度検討し直してみようというやり方をする必要がある。

今日の生物学ではこう考える。細胞は生命の構造的・機能的な基本単位である。生命活動の最小単位であるこの細胞は基本的には核、細胞質、細胞膜から成立していて、生命活動は細胞膜のなかに閉ざされたさまざまな細胞小器官どうしのそれぞれ特有の構造と機能の恒常的な統一と精緻なバランスのうえに成り立っている。細胞を構成している形質膜は今日では生体膜と呼ばれ、この生体膜の複雑でかつ巧妙な仕組みが生命活動にとっては不可欠である。この点で有機的生命と無機物とは構造的に大きく異なっている。生体膜の基本的な機能と構造は、イギリスのレーウェン・フックが細胞を発見して以来、これまでさまざまなモデルとして論じられて来たが、近年シンガーとニコルソンの理論によって、生体膜はさまざまなタンパク質と脂質からなる分子複合体であって、これらが膜上に不均質に、非対称的・モザイク状に分布し、そこではこれらの分子が形質膜のなかを流動的に動いているという、いわゆる流動モザイク説が提唱され、これがほぼ定説となっている。この生体膜は、それが置かれた環境の変動要因、例えば温度・光・圧力・浸透圧・塩濃度・湿度・酸素、栄養などの環境因子に対して適応しながら、細胞の機能を正常に保っている。細胞における生体膜の主たる機能は、情報を受け入れて外界を判別したり、これらの外界と接触しつつ細胞内の代謝を円滑に進めることである。前者の機能は免疫などの生体防御機構と関係し、後者の機能は物質輸送と呼ばれるが、具体的には水・イオン・糖類・アミノ酸・タンパク質などの物質を細胞内に取り入れたり、または逆に細胞外へと排出したりする働きを行う。こうした生体膜のきわめて精緻で巧妙な取捨選択の機能なしには、細胞はおのれの生命活動を維持することができない⁽⁵⁶⁾。

ところでプレスナーは、彼の後の著作のなかで、著名な生物学者である J.B.S. ホールデンの「生命の起源と呼ばれるに最もふさわしい重要な成果は、自己複製能力をもったいくつかの異なった複合体が半透膜に囲まれているということである」という言葉を引用しながら、明らかに生体膜から構成される細胞体の生命活動にかんする具体的なイメージを思い浮かべながら、こう述べている。生命ある構造体の自己維持能力は「その周囲への独特の関係を度外視しては理解することはできない」が、なぜかと言えば「膜形成は…境界付けの《より高度の》段階へ向けてそれらの状態を超えてゆく一歩なのだ。膜は生き《もの》の個別性をきわだたせ、二重の意味の働きをもつ。すなわち、周囲に対して自分を閉鎖し遮蔽することと同時に、周囲に対して開放し媒介することである」と⁽⁵⁷⁾。したがってプレスナーの叙述には決して経験的裏付けがないわけではなくて、その反対であって、こうしたある程度の経験的事実の想定とともに理解されるべきなのである。

先の叙述の解釈に戻ることにしよう。プレスナーがあげている事例Ⅰの図式は死せる物、すなわち無機的事物の場合に相当し、事例Ⅱの図式は生きた物、すなわち有機的生命の場合に相

当することは明らかである。事例Ⅰにおいて物体とその媒体とのあいだに引かれた境界は「仮想的な」「空虚なあいだ Zwischen」にすぎず、物体とその媒体はこの「仮想的な」境界によって一応分け隔てられている。この「仮想的な」境界は、物体が終わるまたは途切れるかぎりにおいて他者としての媒体が始まり、またその逆でもあるという点から見れば、物体または媒体だけにぞくしはせず、むしろ両者にぞくする。ところが事例Ⅱでは、境界は決して「仮想的」でも「空虚なあいだ」でもなくて実在的であって、もっぱら有機的な物体にぞくしているが、媒体にはぞくしていない。有機的な物体は境界によって自らと他者である媒体とを原理的に区別するだけでなく、その始まりまたは中断は媒体に直接に依存してはおらず、これからは相対的に自由であり自立的である。「生きた物体はある現象して目に見える境界をもつ」⁽⁵⁸⁾のであり、もっと詳しく言えば「問題となっている事物は、その境界、ゲシュタルト、形式を、なおそれだけで存立するものとして持っているのではなくて、境界とともに、そして境界のうちに、境界として存在するのであり、この境界は、事物の外にある他の存在者と照らし合わされた、事物の開始または停止を表現する…。」⁽⁵⁹⁾

先の生体膜との比較で言えば、生体膜はまさしくひとつの境界であって、生命体は生体膜を形成することによって外界とおのれとを区分し、細胞内物質および自らのオルガネラを初めとする器官を外界から遮蔽し閉鎖するとともに、この生体膜を媒介項として外界と交渉し、栄養摂取と排出を行う。生体膜は生命体にぞくし、この生体膜が生命体と他者である媒体との境界となる。そのかぎり、生体膜は生命体そのものに対して関係し、また媒体に対しても関係する。これは、まさしくプレスナーの言う「逆方向」の対向関係であり、生命体一般がもつ「自らを超えて存在する」と「自らに対向して存在する」との原理的な二重のアスペクトにはほぼ該当するといえよう。また、実在的な境界をもたない事例Ⅰの場合には、物体とその媒体との関係は、取捨選択を行うことのできる生態膜が介在しないから、相互にストレートに、つまり介在する媒介物なしに直接に働きかけあうという点で「交互的」であるのに対して、事例Ⅱの場合には、いわば主導権は肉体の側にあり、それも生態膜をもち外界に対して選択的に、したがって主体的に対応できるという点で、上述のように境界づけが「絶対的」だと表現しうるのである。

もちろん境界は事物の周縁でもあって、境界輪郭として、また境界形式として生命体の外部を包み込んでいられるから、ゲシュタルトとも関係せざるをえない。しかし、生命体のこうした境界輪郭は、事物核心としての内部からこれを包む外被としての外部との関係のなかで外部領域に現れるから、お互いに橋渡しされえない、内部から外部への、または外部から内部へのこうした方向分岐とのその統一の起点となる圏域でもあり、プレスナーの言葉で言えば「アスペクト境界」でもある。したがって、「ゲシュタルトとしての有機的な形式境界は、ゲシュタルトを超えた、ゲシュタルトによっては汲み尽くされないある性格をもつにちがいない。」⁽⁶⁰⁾ それというのも、「物体がその境界づけのほかに境界通過そのものを性質としてもつとすれば、境界づけは同時に空間境界であるとともにアスペクト境界であり、輪郭はそのゲシュタルト

性格にかかわりなく、全体性形式という価値を獲得する」⁽⁶¹⁾からである。プレスナーによれば、生命性もつこうした二重のアスペクトによって、生命体は先に検討した生命をもたない事物核心とこれの諸性質との関係からも区別される。「だから、事物性の核心具有性は、事物のあらゆる可能な述語（諸性質）の担い手であって、あの中心性とは決して同じではない。特種な生命的な発現はこの中心性に由来し、これによって支えられていると見られる。」⁽⁶²⁾そしてまた、ケーラーとドリーシュの論争も、こうした境界概念に注目することによって初めて真に決着をつけることができる。ゲシュタルト概念はそれだけでは、生きた物がもつ内部的なものとの表現・表出関係をとらえることができず、生命性と生命活動の本質を全体としてとらえるには十全とはいえない。生命性は、ゲシュタルトを超えた秩序形式をはじめとする、生命特有の諸特徴をそなえているからである。プレスナーはこうも述べている。「ゲシュタルト概念は、いわば多次元的な諸現象のなかのひとつの次元だけをとりえているにすぎず、生きたシステムがもつ固有の自己支配をまったく放置してしまう」⁽⁶³⁾、と。こうしてさらに進んで、こうした生命に固有の自己支配の本質を明らかにすることがプレスナーの生命哲学の次の課題となろう。

(6) 有機的な本質諸徴表の理論に向けて

以上に概括したこうした理論的脈絡のなかで、プレスナーは「有機的な本質諸徴表 Wesensmerkmale のア・プリオリな理論」を探求する必要性をわれわれに呼びかけている。彼にとっては、境界および境界の法則は決して経験的に見いだされたものではなくて、仮説的なもの、ア・プリオリなものにはほかならなかったが、プレスナーはここでもカント的なア・プリオリズムに固執している。彼が言うところの「有機的な本質諸徴表の理論」とは、感性的・経験的に確認されうるものではなくて、反対に直観的にとらえられ、感性と経験とが前提としているものである。ゲシュタルトを超えた秩序形式は経験的な方法・手段・証明を超えている。事例Ⅰと事例Ⅱとの関係についてプレスナーはこう述べている。「事例Ⅰと事例Ⅱとのあいだの区別は存在の区別であり、すなわち…それだけで経験されうる区別ではなくて、この区別の諸帰結またはこの区別の現象においてのみ経験されうる区別である…。あらゆる生命にとって特徴的なこれらの諸機能の展開に成功するとすれば、そのことによって、事例Ⅱで表現された事態は、有機的な自然の構成的な諸徴表の基礎および原理であることが証明される。その場合、事例Ⅱは生命諸現象の（原因ではなくて）根拠である。」⁽⁶⁴⁾

ここでプレスナーは、アドルフ・マイヤーが偉大な認知心理学者のヘルムホルツに倣って用いた「有機的な様態 das organische Modale の理論」という学術用語を継承する。アドルフ・マイヤーは、彼の主著『形態学の論理学』のなかで、有機的な実体が化学的關係においてはタンパク質、リポイド、塩分、水分、酸化と還元、酵素の役割などによって、物理的關係においてはコロイド状態によって、生物学的關係においては栄養摂取、成長、自己活動、生殖遺伝お

よびこれらの調整的な結合によって特徴づけられるというオストヴァルトの叙述を引用したあと、「ここであげられた、生きた実体の、さしあたりはまだ純粹な有機的諸徴表は、多くの個々の組み合わせというかたちできわめて広く物理・化学的に分析されているが、これらが有機体全体のなかでダイナミックに一緒に作用していることはまだ完全に探求されているわけではない。こうした諸徴表は、以下においては、簡潔にいつも有機的な諸様態 *die organischen Modale* と呼ばれることになる。『様態』という表現は、ヘルムホルツによって（新版、一九二一年）自然科学的な論理学へと導入された。これは今日では、他の諸性質へと還元することによってはさしあたりそれ以上は分解されえないような質的な究極性を表示している」⁽⁶⁵⁾と述べている。したがって、プレスナーにおいても、様態とは「他の質へと還元することによってはそれ以上分析されえないような質的な究極性」⁽⁶⁶⁾と解されている。

そのような様態のうちで無機的な様態を示す実例としてあげられているのは、またしても色の諸質である。プレスナーによれば、物理学者たちは色を、特定の波長や速度という、計量的にとらえられうる諸層の分析によって、ときには生理学的・心理学的な諸手段を用いて概念構成するが、こうした経験的方法は決して色の現実性を汲みつくすことはできないのであって、色の諸質はただ感性的直観においてのみ把握されうるものである。一般に様態そのものは質へと還元することは不可能であって、このことは有機的な様態においてもそのままあてはまらなければならない。プレスナーがめざす有機的な本質諸徴表の理論とはまさしく、無機的な様態と同じように経験的方法がもはや問うことなく、むしろ自らの前提としているような有機的な様態にかんする理論であり、有機的な諸事象が例外なく従っている普遍的な法則性でもある。ところでプレスナーによれば、そのような有機的な様態とは具体的には、調節・遺伝・物質代謝などの生命の根本にかかわる諸カテゴリーにほかならないのだが、これらは、例えば生命性がないのに生命があるように見せかける紙テープなどのように、生命性の外見的特性を示すにすぎない「指示的な本質諸徴表」とは異なって、「構成的な本質諸徴表」である。生命のこうした「構成的な本質諸徴表」は、生命の現実性を直観することによってのみ獲得され、経験的な方法および経験的な生物学が自分では気づかずに前提しているものである。というのは、「調節・遺伝・物質代謝循環などは、現象における生命の〈何が〉存立を確定する諸契機だから、青さ、甘さ、粗さと同じように、還元不可能である（そして、もしそうだとすれば、その場合にはそれは哲学的にしか理解できない）。…これらの諸契機は、生命の現象的な存在層の構成諸契機として、素朴で科学的な生物学の概念形成にとって主導価値をもつような諸構造を規定している」⁽⁶⁷⁾からである。そして、「生命にとって本質的に必然的であるということは、生命にとって可能性を条件づけるものである」⁽⁶⁸⁾という点で、有機的な様態の性格をもつ諸カテゴリーのうちでも、なかんずく先に事例Ⅱとして図式化された、物体とその境界との根本的な関係を表現する事態こそは、もろもろの生命現象全般を可能にする根本的な条件である。したがって、経験的な方法に依拠しないというプレスナーのこうした方法論的視座からすれば、彼の生

命の哲学的研究は、とりわけ事例Ⅱの事態から「演繹的に」行われるということになる。

プレスナーはこうした有機的な様態の理論を、現実性の記述、そして原因と結果とのあいだの因果的結合という経験科学的な研究手段によらないという意味で、「有機的なもののア・プリオリに妥当する理論」または「有機的なものの公理論」⁽⁶⁹⁾と呼び、そうした理論的仕事を行う者を「自然科学的な論理学者」⁽⁷⁰⁾と名付けているばかりか、さらにこうした領域では哲学者が最も哲学に固有の仕事を行なわねばならないと見なしている。こういうかたちで理論構成を行うことには確かにいくつかの利点がある。こうした理論構成を行うことで初めて、生氣論と機械論の両方ともがおのれの一面性を免れて互いに揚棄され、互いに調停されることができからである。また、生氣論の側からすれば、それが生きたものの非決定性というかたちで様態の還元不可能性を主張したことは生氣論の功績として評価されうるし、そしてたとえ近い将来において、機械論のたえず前進して行く計量的な物理・化学的分析によって生氣論のテーゼが維持できなくなるような事態、つまり生命過程があますところなく計量的に測定されうる物理・化学的過程に還元されるという事態が起こりうるとしても、これに還元不可能な有機的な様態とその理論だけは依然として残り続けることができるからである。

さて、われわれはここでふたたびプレスナーの人間学の方法論的次元の諸問題に直面することになる。それというのも、プレスナーは以上のような視点にもとづきながら、経験または経験的方法と有機的な様態の探究との関係にかんして、こう述べているからである。「経験が、実際に様態と呼ばれるにふさわしいもの、還元できない究極のもの、本質的徴表を教えるのではなくて、経験がすでに気づかずにこれを前提しているのである。」⁽⁷¹⁾つまり、プレスナーはあくまでも有機的な様態のア・プリオリにこだわっているのである。したがって、これと関連して、プレスナーの方法と現象学的方法とのかかわりもまたここで改めて問題とならざるをえない。すでに引用した文章を再度引用すれば、彼はこの問題についてこう述べている。「現象学的な探究は、その本性からすれば、指標となる本質諸徴表のところでは始まらなければならないが、そのさい、現象学的探究が指標となる本質諸徴表を超えて、構成的な本質諸徴表へと踏み込むことができるかどうかは、依然として疑わしい。構成的な本質諸徴表が現象学の研究領域にぞくすることは確かである。それにひきかえ、現象学的探究には、構成的な本質諸徴表のカテゴリー的性格を洞察することは依然として絶対にできない。こうした洞察がどのようにして生物学の論理学の諸問題から、そればかりか生物学の体系化の試みからおのおの生ずるのかを問題にするとすれば、静態的な本質記述の方法が用いられてはならない。生命の諸カテゴリーのひとつの原理または演繹という尺度にしたがって本質諸層をめぐるという試みがなされなくてはならない。」⁽⁷²⁾ここでプレスナーは現象学的方法と袂を分かち、現象学が及ばない有機的な様態のア・プリオリな理論へとつき進もうとする。

ここで彼がモデルとして依拠するのは、カントによって典型的に示されたカテゴリーの超越論的演繹である。いわく、ア・プリオリとは「特定の事態がわれわれの経験に生じるために満

たされていなければならないような、可能性の諸条件⁽⁷³⁾であり、「諸カテゴリーとは、概念ではなくて、概念を可能にするものである。諸カテゴリーとは、異質な諸領域のあいだの、つまり思考と直観、主観と客観とのあいだの一致の諸形式である⁽⁷⁴⁾」、と。ここでわれわれには次のような疑問が生じないわけにはゆかない。それは、なるほど、プレスナーはカントとよく似た語法で語り、これを根拠として自らのア・プリオリズムを主張しているのだが、しかし、カントが悟性概念としての諸カテゴリーの超越論的演繹を行ったのは、なかんずく対象認識という認識論的な脈絡においてであったのに対し、プレスナーがここで主として念頭に置いているのが先に掲げた事例Ⅱのような境界と生命との関係にかんする事態であり、したがって主として存在論的な根本事態だとすれば、少なくともア・プリオリズムの根拠付けにおいてはプレスナーの理論とカントのそれとは根底において一致しないのではないか、ということである。ここで思い起こされるのは、プレスナーが『有機的なものの諸段階と人間』の冒頭で、アレクサンダー・フォン・フンボルトがシェリングにあてた次のような手紙の一節をモットーとして掲げたことである。「自然哲学は、決して経験的諸科学の進歩にとって有害であってはなりません。その反対に、自然哲学は、新しい諸発見を基礎づけると同様に、発見されたものを諸原理へと帰着させるのです。そのさいに、頭脳の力によって化学を推進することが、自分の手をぬらすことよりも楽なことだと考えるような部類の人間が生まれるとすれば、それは、決してあなたの責任でもなければ、自然哲学の責任でもありません。われわれのところの粉屋がしばしば、数学者が算出して定めた機械よりも良い機械をつくるからといって、解析学が非難されてもよいのでしょうか。」⁽⁷⁵⁾つまり、ここでは自然哲学と経験諸科学とが対比され、解析学または数学者と粉屋とが対比されており、これは明らかにプレスナーのいうア・プリオリな有機的様態の理論と生物学理論との対比に重ね合わせられる。われわれの理解では、事例Ⅱに代表される図式と生命現象の現実との関係は、前者が後者のうちに内包されているとともに、後者から一定の手続きをへて実在から析出された純粹で理想化されたばかりか、構成的な諸契機も含みうる関係であって、その意味では前者は決して無条件にア・プリオリではありえないと考えられる。もしもこの理解が正しいとすれば、プレスナーのいう有機的諸様態の理論のア・プリオリ性をめぐる問題は依然として彼の理論の最も理解困難であるとともに矛盾をはらんだ部分として残り続けることになろう。この困難と矛盾とがプレスナーの以後の理論構成においてどのような自己展開をとげるかは、次章以降において探究されるであろう。

(次号へと続く) 2000年7月28日

注(1) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, Gesammelte Schriften IV, Suhrkamp, S. 82

(2) Ibid., S. 80. なお、物体と並ぶもうひとつの実体である精神の属性を思考作用、すなわちコギタティオ Cogitatio として規定したのはデカルトであったが、こうしたコギタティオを現象学的な意味において再興したのは、周知のようにフッサールである。彼は、潜在的な背景直観に対して顕在的に注意を向けているという様態における意識体験をコギタティオと呼んだ。

- (3) エルンスト・マッハは彼の名著『感覚の分析』のなかで、例えば「特種な時間感覚が存在するということは、以上からして疑問の余地がないと思う。音列はまったく違うがリズムは同じである二つの拍子が隣接して聞こえてくる場合、同じリズムだということは直接に認知される。これは悟性や熟慮のなせるわざではなく、感覚の所業である。色を異にする物体が同じ空間形態を呈する場合があるのと同様、ここでは音韻上色合いを異にする音声形象が同じ時間ゲシュタルトを有するというわけである」(マッハ『感覚の分析』、須藤吾之助・廣松渉訳、法政大学出版局、203頁)と述べて、空間的形態やメロディーのような音のゲシュタルトをわれわれが直接に感覚しうると主張した。エーレンフェルスはこれを受けて、このマッハのテーゼを「ゲシュタルト質」という概念を用いてさらに明確にしようとした。村田純一氏のまとめによれば、エーレンフェルスがいう「ゲシュタルト質」の特徴は、感覚要素の総和とは異なった、総和以上のものであり、それに新たな要因が付け加わったものであること、ゲシュタルト質自身が複数の階層を形成すること、そしてゲシュタルト質が直接に与えられるものであり、基礎的体験に付加的な知的作用を必要とするものではないことにある。村田純一『知覚と生活世界』(東大出版会、45頁以下)を参照されたい。
- (4) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, S. 84
- (5) Ibid., S. 81~82
- (6) Ibid., S. 84
- (7) Ibid., S. 85
- (8) Ibid., S. 86
- (9) Ibid., S. 87
- (10) Ibid., S. 79
- (11) Ibid., S. 89
- (12) Ibid., S. 89
- (13) Ibid., S. 94
- (14) Ibid., S. 95
- (15) Ibid., S. 95
- (16) Ibid., S. 101
- (17) マックス・シェーラーはフォン・ユクスキュルの環境世界説に関連してこう述べている。「動物は、感覚系と運動系との分離によって、そしてそのつどの感覚的な内容のたえざる還帰的報告によって、ほとんど自分自身に引き戻されている。つまり、動物は『身体図式』も所有している。しかし、それでも動物は環境世界に対していつも忘我的に行動する。動物が「知能的に」行動するところでもなおそうである。そして、動物の知能は有機的・衝動的・実践的に束縛されたままである。」(Max Scheler, Die Stellung des Menschen in Kosmos, Bouvier, 1991, S. 41)「それゆえに、『精神的』存在者は、もはや衝動と環境世界とに束縛されておらず、『環境世界から自由』であり、…『世界開放的』である。そのような存在者は『世界』をもつ。」(Ibid., S. 38)しかし、フォン・ユクスキュルとシェーラーとのあいだの根本的な相異は、動物学者である前者が生物である人間をも当然ながら環境世界のなかの一員に位置付けて理解しているのに対し、哲学者であるシェーラーは環境世界を人間以外の動物にのみ限定し、彼らだけに通用する世界となしているという点である。後者の考え方がいかに生物学的な次元からほど遠いものであるかは明らかであろう。
- (18) Heidegger, Sein und Zeit, Elfte Auflage, Max Niemeyer, S. 58
- (19) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, S. 23
- (20) Ibid., S. 107
- (21) ヤーコブ・フォン・ユクスキュルの環境世界研究の成果は、プレスナーの『有機的なものの諸段階と人間』の特に第6章「動物の領域」のなかで援用されており、とりわけ動物という「遮断された主体における刺激と反応の配分」の節では、ユクスキュルの「機能環の図式」が直接引用され、図示されている。Ibid., S. 315以下を参照されたい。
- (22) Ibid., S. 108
- (23) Ibid., S. 109
- (24) Ibid., S. 113

- (25) Ibid., S. 109
- (26) プレスナーは他の箇所でこう述べている。「哲学の用語法でいうカテゴリーとは、経験が従いはするが、しかし経験には由来しないある形式のことである。」(Ibid., S. 109) さらに、本論文注(73)、それに(74)を参照されたい。
- (27) Ibid., S. 110
- (28) Ibid., S. 110
- (29) Ibid., S. 110
- (30) Ibid., S. 112. なお、エーリヒ・ヴァスマンのこうした教説は、彼の1925年の主著『アリの擬態』において展開されている。Wasmann, Die Ameisenmimikry, Verlag von Gebrüder Borntraeger, 1925を参照されたい。
- (31) Ibid., S. 107
- (32) Ibid., S. 123
- (33) Ibid., S. 115~116
- (34) Ibid., S. 124
- (35) Ibid., S. 121
- (36) カントが言及している手袋の話とは、「不一致の対称物」incongruente Gegenständenにかんするカントの叙述である。「まさに同一の限界内には包まれることができないが、他の立体に完全に等しく、また類似しているひとつの立体を、私は前者の不一致対称物と名づける」(Kant, "Von dem ersten Grunde des Unterschiedes der Gegenden im Raum", Kants Werke [Akademie], Bd. II, S. 382, 1768. 「空間における方位の区別の第一根拠について」、『カント全集』, 第三巻, 二〇八頁, また同三二四頁の訳者解説をも参照されたい) と述べているように、カントにとっては、オイラーの見解に見られるような「絶対空間」の現実性を主張しようとするれば、その確実な根拠を右手と左手, 相似的なふたつの球面三角形, 対象とその鏡像などのような「不一致対象物」にもとめなくてはならない。これらのものは、お互いに他にたいして等しく、また相似的ではあるが、同じ限界のなかに包まれることができない。またカントは、『プロレゴメナ』のなかで次のように手袋の例をあげているが、これもまたプレスナーがあげているものとはやや異なっている。「私の手または私の耳に似ており、すべての点で等しいものとして、鏡のなかのその像以上のものが何かありうるだろうか。ところが、私は鏡に見られるような手をその原型の代わりに置くことはできない。なぜなら、原型が右手なら鏡の像は左手であり、右耳の像は左耳であり、像は決して原型の代わりになることはできない。ところで、ここには悟性がともかく考えることができるようないかなる内的な相違もない。ところが感官が教えるかぎりでは、相違は内的である。なぜなら、左手は右手と、たがいのすべての同等、類似にかかわらず、同じ境界のあいだに入れることはできない〔両者は合同となることはできない〕。一方の手の手袋は他方の手に使われることはできない。」(Kant, Prolegomena, Kant Werke Bd. IV, S. 286)
- (37) プレスナーは、「空間的」と「空間具有的」との区別に関連して、『有機的なものの諸段階』の他の箇所でこう述べている。「生きた肉体は…空間を主張するものとして、ただ空間を満たしているにすぎない、生命のない物体から区別される。…これに対して、空間を主張する形成物は、それがおのれを超えて(おのれのうちに入り込んで) いるということによって、『おのれの』存在の場所に対して関係している。空間を主張する形成物は、おのれの空間性の外部で空間のなかに入り込んでいるか、または空間具有的にあり、そのかぎりにおいておのれの自然的な場所をもっている。」(Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, S. 12~13) また、プレスナーは『笑いと泣き』(邦訳名『笑い泣きの人間学』)のなかで「自我の非空間的な本質」にふれ、さらに次のように述べている。「私の肉体における私自身のこの内部位置は、きわめて明らかなことに、もろもろの物の空間のなかに直接はめ込まれている私自身の在り方と交差している。…私の身体は…私の知覚の地平に出現する他の物的な事物と同列である。…外界にぞくする私自身の身体を含めて、外界の諸形象が私に働きかけるのを静かに見守ろうとも事情は同じことであって、いずれにしても私の存在は両義的 doppeldeutig である。すなわち、私は物身体 Körperleib として、物身体のなかにある。」(Plessner, Lachen und Weinen, Gesammelte Schriften VII, S. 239~240) こうしたプレスナーの考えとフッサールの例えば「すべての空間性は、運動において、客観そのものと自我の運動のなかで、しかもこうした運動によって与えられる方向づけの変更を伴いながら構

- 成され、与えられる」(Hua. XIV, S. 154) という叙述との関連は明らかであろう。
- (38) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, S. 130. なお、事物の核心についてフッサールはこう述べている。「事物というものは必然的にたんなる『現出諸様式』において与えられている。その場合必然的に、『現実的に提示されたもの』の核心は、統握にかなったかたちで、非本来的な『共所与性』の地平によって取り囲まれ、多かれ少なかれ漠然とした無規定性の地平によって取り囲まれている。しかしながら、この無規定性の意味はさらにまた、事物として知覚されたものが一般にそしてそのものとして持つの普遍の意味によって、あらかじめその下図を描かれている。いいかえれば、われわれが事物知覚と名付けているこの知覚の型の普遍的本質によって、あらかじめその下図を描かれているのである。」(Husserl, Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, Max Niemeyer, S. 80)
- (39) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, S. 130
- (40) こうした立論を行うさいにプレスナーの念頭に置かれているのはもちろんフッサールの「射映 Abschattung の法則」である。「射映された」と「射映」とは、日常語としては、それぞれ「輪郭を描かれたかたちで」と「輪郭を描くこと」くらいの意味であるが、フッサールの『イデー』では、たとえば次のように叙述されている。「同じ事物についてのある『全面的な』、持続的に統一的に自己自身のうちで確証される経験意識に本質必然性においてぞくするのは、持続的な現出多様性と射映多様性の豊富なシステムである。そして、その多様性においては、身体具有的な自己所与性の性格をそなえて知覚のうちに落ち込んでくる対象的な契機はすべて、規定された連続性というかたちで、おのれを射映する。」(Husserl, Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, Max Niemeyer, S. 74~75)
- (41) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, S. 137
- (42) Ibid., S. 137
- (43) Ibid., S. 138
- (44) よく言われるように、メルロ-ポンティの問題意識はさまざまな点でプレスナーのそれと驚くほど共通している。例えば、「知覚反応を物理的モデルによって説明できるのは、それが自然状態においてはまり込んでいる行動の文脈から人為的に孤立させられている場合だけだ…」(メルロ-ポンティ『行動の構造』, 滝浦静雄・木田元訳, 224頁)などの言葉を参照されたい。
- (45) Wolfgang Köhler, Gestaltprobleme und Anfänge einer Gestalttheorie, Jahresbericht über die gesamte Physiologie und experimentelle Pharmakologie, Bd. 3, 1922, S. 514
- (46) Hans Driesch, "Physische Gestalten" und Organismen, Annalen der Philosophie und philosophischen Kritik, Bd. 5, Heft, 1925, S. 3
- (47) Plessner, Vitalismus und ärztliches Denken, S. 1959
- (48) Ibid., S. 1959
- (49) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, S. 31~32
- (50) Ibid., S. 198~199
- (51) Ibid., S. 148
- (52) Ibid., S. 149
- (53) ヘーゲルの境界または限界にかんする理論は、彼の『論理学』第一巻、第一篇、第二章「Dasein 定有」の箇所で開催されている。「それゆえに或るものは直接的な自分に関係する定有であって、境界 Grenze (限界) をさしあたっては他者に対立するものとしてもつ。すなわち、境界は他者の非有であって、或るものそのものの非有ではない。或るものは境界のなかで、その他者を規定している。…それゆえに、或るものが他者にたいしてもつ境界は、また或るものとしての他者の境界でもあって、この他者の境界によって他者は第一の或るものを自分の他者として自分から排斥する」(Hegel, Wissenschaft der Logik, Hegel Werke in 20 Bänden, Band 5, Suhrkamp, S. 136) 「或るものは境界によって或るもの自身なのであり、境界のなかにおのれの質をもつ」(Ibid.) 「したがって、境界は或るものと他者とを存在させるとともに、また存在させないような媒介である」(Ibid.) などの叙述を参照されたい。有機的な諸様態の理論の構築をめざす場面では、プレスナーにとって導きの糸となるのは、現象学的方法ではなくて、むしろ弁証法的方法である。ヘーゲルはプレスナーにとって決して無関係ではない。

- (54) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, S. 155
- (55) Ibid., S. 155
- (56) 以上の叙述は、野澤義則『生体膜に学ぶ』（共立出版）を参考にした。なお、生物の免疫機構がその生物の「自己」および「非自己」との同定を区別とにはたしている役割については、多田富雄『免疫の意味論』（青土社）を参照されたい。
- (57) Plessner, Ein Newton des Grashalms?, Gesammelte Schriften VIII, Suhrkamp, S. 257. なお、この J. B. S. ホールデンの文章は、1957年にモスクワで開催されたシンポジウムの報告集“The Origin of Life on the Earth”に収録されたミッチェルの論文 P. Mitchell, The Origin of Life and the Formation and Functions of Natural Membranes, p. 440のなかからのプレスナー自身による重引である。
- (58) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, S. 151
- (59) Ibid., S. 152
- (60) Ibid., S. 153
- (61) Ibid., S. 154
- (62) Ibid., S. 150
- (63) Ibid., S. 155~156
- (64) Ibid., S. 158
- (65) Adolf Meyer, Logik der Morphologie, Berlin, 1926, S. 29~30. なお、アドルフ・マイヤー・アビツヒは、1893年エムデン生まれのドイツの哲学者、自然科学史家で、長くハンブルク大学教授を務めた。自然科学の成果にもとづいてホーリズム的な形而上学を展開したことで知られる。本論文で掲げた著作以外の主著として、“Ideen und Ideale der biologischen Erkenntnis” 1933（『生物学的認識の理念と理想』），“Naturphilosophie auf neuen Wege” 1943（『自然哲学の新しい道』），“Gedanken zur Theorie und Philosophie des Organismus” 1965（『有機体の理論と哲学のための思索』）などがある。
- (66) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, S. 158
- (67) Ibid., S. 171
- (68) Ibid., S. 175
- (69) Ibid., S. 160
- (70) Ibid., S. 158
- (71) Ibid., S. 168
- (72) Ibid., S. 168
- (73) Ibid., S. 29
- (74) Ibid., S. 169
- (75) Ibid., S. 35

（おくや こういち 本学人文学部教授 哲学専攻）

Die vorliegende Reihe der Abhandlungen über Helmut Plessner beschäftigt sich mit seinen zentralen Anschauungen vom Menschen, die er in seine Hauptwerk “Die Stufen des Organischen und der Mensch” entwickelte. Sie versuche, seine philosophische Anthropologie zu charakterisieren und mit den anthropologischen Grundgedanken von Max Scheler sowie Arnold Gehlen zu vergleichen, wobei die Gemeinsamkeiten und Unterschiede festzustellen sind. Der im vorigen Band veröffentlichte erste Teil der Reihe behandelt die Beziehung von Plessners Philosophie zur “Lebensphilosophie”, das Aufgabenbewußtsein bei seiner Anthropologie sowie den Einfluß der Kantischen kritischen und phänomenologischen Methode auf seine eigene. Der zweite Teil im vorliegenden Band betrachtet seine Kritik am Cartesianischen Alternativprinzip von Leib und Seele, die Beziehung seiner Positionalitätstheorie zur Umwelttheorie von Uexküll sowie die Auseinandersetzung von Driesch mit Köhler, um dann aufgrund dieser Betrachtungen seinen Begriff der Grenze und seine Theorie von den Wesensmerkmalen des Organischen zu erforschen.